

第3回アジア研究者国際会議 (ICAS3)

山本博之

2003年8月19～22日、シンガポールのスタンフォード・ホテルで第3回アジア研究者国際会議 (ICAS3) が開催された。19のパネルが同時に進行し、1000人を超える参加者が4日間で約260のパネルで議論を行った¹。

ほとんどの報告者がペーパーを配布しなかったため、国際会議でしばしば見られるようなペーパーの奪い合いはなく、会場でのやり取りがすべてという会議となった。パネルの配列は大規模な会議にしてはかなり考えられたものであるという印象を受けたが、部分的に似たような報告が同じ時間帯に別のパネルに重なることもあり、ICAS3の様子を総合的に紹介することはとても不可能である。以下では、私が参加したパネルのうち3つについて、JAMS会員の報告をまじえて簡単に紹介したい²。

*

ICAS3で私が期待していたものの1つにアチェ問題のパネルがある。会議の2日目、「民主化、市民社会、そしてアチェの将来」と題するパネルで、ホー・バオガン (NUS) の司会のもと、マイケ

ル・バック (USAID)、ルクマン・タイプ (UTM)、アレクシウス・ジュマドゥ (パラハンガン・カトリック大学)、アンソニー・リード (NUS) によるパネルが組まれていた。ルクマン・タイプはアチェ出身で、現在ではマレーシアに拠点を移してアチェ問題に対して積極的に発言している。その発言内容はアチェの独立派に近く、仮にルクマン・タイプをアチェの独立派の(自発的)代弁者と見るならば、USAIDに属して実務家の立場からアチェ問題に取り組んでいるマイケル・バック、そして歴史学の立場からアチェ問題に対して発言しているアンソニー・リードらがどのような議論を行うのか、アチェに隣接する地域に住む者として期待していた。

議論は必ずしも1つの方向に収斂していくような形には進まなかったが、その中でも特に興味深かったのがルクマン・タイプの主張だった。ルクマン・タイプはマレーシア社会における民族ごとの「自治」を取り上げ、インドネシアにおいても民族・地域ごとの「自治」によって問題解決の可能性があるのでないかと問いかけ、マレーシア型の民族政治をインドネシアに導入することを主張した。アチェ独立派によるインドネシアからの分離独立という主張に比べると、インドネシアという枠組みを維持した上でのアチェ問題の解決を求めるといって、やや穏健なものになっている。「インドネシア民族 = 国民」は1つである、との立

¹ ICAS3の各報告タイトルは<http://www.fas.nus.edu.sg/icas3/>で検索できる。

² ここでは紹介できなかったが、ほかにJAMS会員による報告として、菅原由美 (東京外国語大学) 「Priyayi Islamic Polemics in Mid-19th Century Java」、山本博之 「Muslim Brotherhood in the Malay World in the 1950s」があった。

場を取るインドネシアでは受け入れられにくい議論だろうが、マレーシア在住のアチェ人から出された解決策として興味深い。

これに対して、アンソニー・リードの議論はやや期待はずれだった。歴史学者であるアンソニー・リードにはアチェの現状分析ははじめから望んでいなかったが、アチェは歴史的にイスラム教の影響が大きく、そのため現在に至ってもウラマーたちの役割を見ることが大切であると指摘するばかりで、そこに従来言われていること以上の意味を見出すのは難しいように思った。

これに比べると、この前日に別のパネルで行われたアチェについての議論に興味深いものがあった。「インドネシア政治」と題するパネルで、まずミシェル・アン・ミラー(ノーザン・テリトリー大学)が、インドネシアで1999年以降進められている地方自治の文脈におけるアチェ特別州法の導入を巡る諸問題を紹介した。

続いて西芳実(東京大学大学院・博士課程)による「Between the Secular Nationalist and the Islamic Revivalist in Indonesia: Hasan Saleh and Aly Hasjmy in the Making of the Aceh Special Province」は、「従来のアチェ現代史研究は、イスラム主義者であるウラマーと世俗的ナショナリストであるプムダ(青年)の対抗関係というアンソニー・リードの図式から脱却しきれていない。これでは、イスラム主義とインドネシア・ナショナリズムの間で柔軟な立場を取った人々を分析の枠外においてしまうことになる」と批判し、そのような「柔軟な」立場をとった人物とし

てハサン・サレーとアリ・ハシュミの行動を分析した。討論では、この2人を積極的に取り上げることの意味について、フロアで参加していたアンソニー・リードを交えて活発な議論が行われた。

このほかにアチェ問題と関連して、1950年代のインドネシアにおける地域主義の再検討に関するパネルもいくつか組まれており、特にスラウェシにおける地方反乱を扱った報告が少なくなかった。

*

インドネシアにおける民族アイデンティティを扱ったパネルにインドネシア華人についての報告がいくつかあったのが目を引いた。また、これと別に、華僑・華人問題についてのパネルも少なくなかった。

これらのパネルにいくつか参加して感じたことは、欧米の研究者は華僑・華人の間の繋がりが密であることに関心を寄せて、これを家族主義などの様々なモデルを用いて描写しようとし、これに対して中国系の研究者が自らの経験を活かして華僑・華人の間の繋がりを説明しようとする、という図式だった。その一方で、中国文化より土着文化のほうが優勢である社会に住む中国系の参加者から、「自分は 国民の一員であるはずなのにまわりからはチャイニーズだと言われる。自分はいったいチャイニーズなのか、チャイニーズとは誰のことを指すのか」といった疑問が投げかけられ、これに対応する形で、中国系の報告者から「自分たちを中国系として一括りにして扱うのをやめてほしい」との発言もあった。

ここで興味深いのは、自分のことを中国系として一括りに見ないでほしいと言う人が、自分の報告では「中国系として」語ることが少なくないことである。このように、あるときには中国系を名乗り、またあるときには中国系と見られることを嫌う、という態度は実に人間くさいものであって共感もてるが、篠崎香織(東京大学大学院・博士課程)による「China and Chinese Overseas: Re-examination of the Meaning of “Protection” from the *Qing* Government to the Chinese in Malaya」は、このような現象について学問的な説明を試みたものであると言える。篠崎は、20世紀初頭のシンガポール/マラヤに在住する中国系住民を事例に、彼らがシンガポール/マラヤと中国のそれぞれの地域において生活や商売を行う上で公権力による保護が保証されることを求め、中華総務商会の設立はその一環として捉えることができると論じた。この報告はシンガポール華人のアイデンティティをシンガポール/マラヤおよび中国の双方を見ることで論じた試みであり、シンガポール/マレーシアの華人研究者だけでなく中国研究者にも関心のある内容だったようで、報告者はセッションが終わった後も中国研究者に囲まれて多くの質問を受けていた。

*

井口由布(東京外国語大学・博士課程)は、「“Area Studies” and National Identity: Reconsidering the Concept of “Plural Society” in Malaysian Studies」と題する報告を行った。井口は、マレーシア研究においてファ

ーニバルが唱えた「Plural Society」の概念が変化し、「Plural Society」を構成する各社会が「人種」から「民族」に変わる過程で文化的な要素が重要になり、また、各「民族」が文化的に均質な存在であるとの認識も生まれ、これによってマレーシアにおける「3 民族」という認識が生まれたと論じた。

*

ここで紹介した報告は、いずれもマレーシア/シンガポールにおける民族概念が中心的なテーマとされている。これらの報告と別の形でマレーシア/シンガポールにおけるアイデンティティを扱ったものとして、最後に映画に関する報告を2つ紹介したい。ティモティ・バーナード(NUS)は1950年代のマレー映画に登場した人気女優を比較し、その中でもマリア・メナドが人気を博したことの背景として、当時マリア・メナドが映画だけでなく家電製品のCMにしばしば登場し、「近代的主婦」の象徴として見られるようになったことがあると指摘した。また、クー・ガイチェン(ビクトリア大学)はアジア映画に登場する男性像を論じた。クーは、日本でも紹介されたシンガポール映画『フォーエバー・フィーバー』(1999年)を取り上げ、主人公のアー・ホックにシンガポール人というローカル性とブルース・リーやジョン・トラボルタなどを模した男性の肉体というグローバル性の共存が見られると指摘した。